

同窓会—70年の歴史

同窓会70年の活動

同窓会の誕生

我が同窓会は大正3年3月第1回の卒業生が社会に出た時と同時に生れ出でたる訳であるが、同窓会と名称を付して具体化したのは同窓会の規則が出来て、会員の承認を得る様通知を出し翌大正4年の1月からであるといつてよからう。其の時の会員は養蚕科製糸科を通じ90余名であった。規則の制定は忘れもせぬ1月の初め、製糸部事務室で松井清三・清宮保の2君と小生とが卓を囲んで盛岡の高等農林のだったか、その同窓会規則と小県蚕業学校の同窓会規則とを参考として作ったものだ。其の条項の簡単なこと今から思えば噴飯沙汰だ。何でも6章7条に出来ていて名称は上田蚕糸専門学校同窓会で、組織は専門学校本科卒業生を以てし、(後間も無く本科及選科修業生も加えた)。目的は今も昔と変わらず母校との連絡を計り会員相互の親睦云々、蚕糸業の改良発達云々等であった。事務所は専門学校内に置き、事業は総会の開設、刊行物の発行、その他必要と認めたる事項であった。役員としては只単に幹事若干名を置き幹事は会務を処理するとあるばかりで、当時の在校同窓生が自称幹事の役目を務めた。

規則の改正は総会の決議を要すとあるばかりで、其他の事は何も定めて無かった。以上が当時一般会員に配布して意見を求めた原案の内容と記憶する。是に就て色々意見を申来する人々も相当あったのは勿論と云つてよからう。夫から年を追うて幾度かの規則の改正を経て居る。殊に其中でも大正7年には支部設置に関する規則制定と共に各地に支部の設置を企図して彼我相互の連絡を益々密接にするようになって来た。

終に昭和2年に於て規則の改正と共に各地支部設置の実も着々挙がり、代議員制も新たに設けられて本会が有機的に活動し得る基礎が確立した次第である。

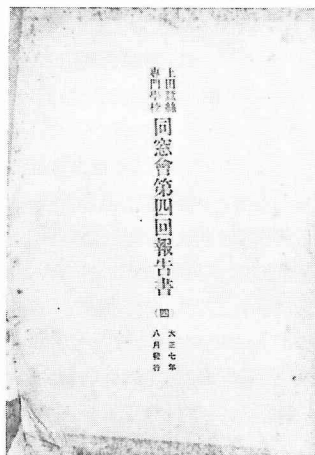
同窓会が出来た当時の仕事は只今と比べては大層その趣を異にしていた。外部との交渉も無く只単に時々同窓生の異動や母校の状況を半紙型の一枚印刷に付して会員に配布することや、物故した同窓生の弔慰金の募集、集金、整理等であった。

第1回同窓会報は大正4年4月に発行した。是れ天にも地にも唯一の同窓会機関雑誌誕生の年月であるの

だ。始めは同窓会報告書という表紙付であったが第7号より「告書」の2字を削除して同窓会報となった(大正10年7月)。内容は母校における諸先生の試験研究の掲載を主とし之に同窓会の記事(会報、会計、会員異動、規則等)を附記するという型式であった。

前に記した本会記事の示す様に本会は当初設立の昔より今に至る迄全く自治的の会であるということの特徴とするのである。従つて別に会長も無ければ顧問も無かったのである(尤も最近規則の改正に伴いて校長を名誉会長に推し母校職員に賛助員になっていただいで居るが之も時世の然らしむところかも知れない)。

同窓会報も初めは年1回の発行であったが大正11年から凡そ2回を目的として発行されるようになり、次第にその内容も充実してきたが、昭和3年からは従来発行されて居た会報を其内容によって二分し、1は純



然たる蚕糸業の学術雑誌として専ら試験研究の発表諸調査の報告、並に抄録等を登載し、是を「蚕糸学雑誌」として発行することとなり、他の1は主として本支部、会員等相互の通信連絡機関とし、従来の様に「同窓会報」として各年2

回宛発行することになったが、昭和5年に至り、蚕糸学雑誌は年3回宛発行するようになり、一方同窓会報は20号を以て廃刊となり、之に替るに菊信版10頁から20頁の月刊千曲時報が生れて現在に及んで居り、又同窓会という名称も昭和7年からは千曲会と呼称することになったのは各位の御承知の通りである。

事務所

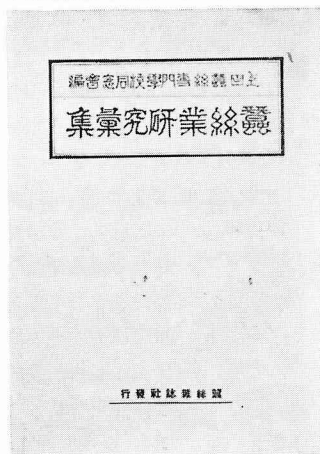
同窓会事務所は初めは養蚕部では養蚕部事務室、製糸部では製糸部事務室の一隅、助手の机であった。何

も無くては不便とあって同窓会印、印肉入、会計簿、其他切手、紙類等を入れるべき2尺に1尺5寸許の錠付の木箱2個を購入して一つは養蚕部に、1つを製糸部へ備えて置いた。今1つ手提金庫1個を備えて其中に僅ばかりの金を入れて恐る恐る保管したものだ。保管は会計の大金庫に依託した事もあった。手提金庫の錠を下す時ピーンと銀鈴の音がするのを珍らしがった時代もあった。2個の木箱は夫から夫と係の移動と共に転々し、或は宿直室の戸棚の中或は事務室の本棚の上、とめまぐるしくも、移転したものだ。

(松村季美 千曲時報67号より)

蚕糸科学講演会

母校創立15周年を記念して同窓会主催第1回蚕糸科学講演会が大正14年11月21日から25日まで5日間にわたって母校道場で開催された。聴講者は本会々員365名、会員外156名、合計521名の多数に上り、意外の盛会となった。また講演会期間中二回、夜間を利用して聴講生研究報告会が開かれた。第一部会(養蚕業方面)、第二部会(製糸及



び紡織業方面)に分って多数の有益な報告があった。同報告の概要は上田市海野町蚕糸雑誌社より「蚕糸業研究集集」として出版された。

第1回代議員会は、昭和2年12月4日午前10時より母校の元化学教室で開催された。先ず針塚名誉会長が開会の辞を述べ、次いで蒲生幹事長の経過報告があり、議長および役員選挙が行なわれ、議題に入った。

第一回代議員会協議問題

1. 本会予算及び決算に関する件

(イ)講演会特別会計報告の件 (ロ)昭和3年度予算案の件

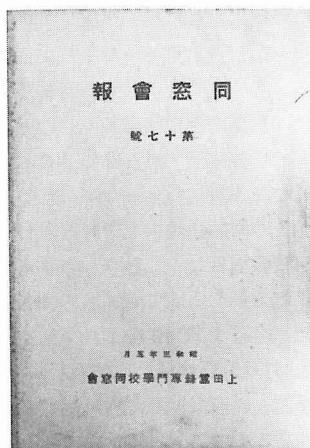
2. 20周年記念事業に関する件

(イ)針塚先生頌徳事業に関する件 (ロ)母校勤続職員彰功の件 (ハ)本会機関雑誌拡張の件 (ニ)記念講演会開催の件 (ヒ)物故同窓生追悼会開催の件 (ヘ)頌徳事業寄附金募集に関する件

3. 各支部提出問題に関する件

同窓会機関雑誌の拡張

第1回代議員総会で近畿支部から「従来の会報を拡張し、純学術雑誌と会報の2種に分ち、学術雑誌はその原稿を独り同窓生のもののみに止めず、相当稿料を支出して一般より募集し、また販売も広く会員外の人々にも普及化せんとす。而して費用の出途は従来校友会費として納入せし一円を校友会当局の了解を得てこの方面に充当す」。と提案が行なわれ、代議員一同異議なく、これを理事会に委任し、関係者と適宜協議の上、実行することとなった。



改版された同窓会報(第17号)は昭和3年5月に発行された。内容は口絵(千曲川所見)、改版の御挨拶(理事長蒲生俊興)、同窓会の思い出(松村季美)、本会記事、支部だより、本部だより、母校

だより、学窓だより、消息、説苑(富士絹に就いて…杉木政義、桑葉及び繭の生産費に就いて…青水針三郎、対立する二人の学者…柴田末治)、会計報告、現住所の移動及び訂正、同窓会規則、雑報等が掲載された。

改版の御挨拶

理事長 蒲生俊興

同窓会報は、現在迄毎年、凡そ、二回宛発行致して参りました。本会報の拡張は、従来度々、総会の議題にも上ったのでありますが、いつも経費の出途に沮まれて、実行する域には至りませんでした。今哉、卒業生の総数も漸次増加して、千名の多きに垂々とする状態になり、従って、貴重な業績の発表を寄せらるる会員諸氏も非常に殖えて参りましたので、此際、是非経費の捻出を慮って、拡張、充実致したいと思って居たのであります。たまたま昨秋本会の規則が改正せられて、本、支部の制度となったために、此の二者を縦貫する連絡機関としての雑誌が又、別個の意味に於て、必要となったのであります。

事態漸くの如く、各方面から其の拡張を要望せられて居りました時恰も、近畿支部より総会へ、本誌拡張の件が提議せられ、其の議が容れられることになりまして、茲に始めて、新らしき陣容を整ひ、一新せる面目を以て、会員諸氏に見えることになったのであり

ます。即ち、是まで発行されて居りました会報を、其の内容によって二分し、1は純然たる蚕糸業の學術雑誌として、専ら、試験研究の発表、諸調査の報告、並びに抄録等を登載し、1は主として、本、支部、会員等相互の通信連絡機関としたものであって、此の両雑誌とも目下の所では、年2回宛併せて4回発行の予定であります。學術雑誌は『蚕糸學雑誌』と題され目下上梓中でありますから、不日、御送附致す筈であります。本誌は、従来の『同窓會報』其の儘の名を踏襲致しますが、其の内容は前記の事情でありますから、其意味に於て、充分、御利用あらんことを切望し、茲に、一言を贅した次第であります。

學術雑誌は「蚕糸學雑誌」の名称で昭和3年7月に創刊された。＜目次＞蚕蛹の分化変態に関する研究 勝又藤夫。家蚕の体液及び消化液の水素イオン濃度に関する研究(第一回報告)、健康及び軟化病蚕に就いて 勝又藤夫。クハキジラミに就いて 中島茂、山本誠、片山次夫。蚕体体液の理学的性状—第1報—体液の比重に就いて 門平潤一郎。桑種子の発芽並びに子苗の發育に及ぼす各種化学物質の影響 遠藤保太郎、今村良郷。原種に於ける世代の差異が三元交雑種の実用的諸形質に及ぼす影響に就いて 斉藤菊雄。太陽灯の蚕、繭及び生糸に関する実験 井上柳梧、山崎寿、堀久三郎、宮下和子、大川忠一郎。

千曲時報の発刊

従来刊行されていた同窓會報は昭和4年7月発行の第19号を以て廃刊となり、これにかわって新たに千曲時報が昭和5年4月より、毎月1回15日に同窓會出版部より発行された。定価は1部5錢、1年購読は郵税共に50錢であった。

発刊の辭「……本誌題して『千曲時報』と呼ぶ。千曲の艱難を征服してうねりうねりの千曲の永却際に迄推し進まんとする我が熱誠なる蚕糸業同人の時報である。蚕は堪えず首を振って営繭する。その出来た繭たる、これ邦国の国脈をつなぐ主要素である。その繭糸の状を見る時又千曲である。この千曲の故に繭形あり、縮皺あり、緊張あり。更に現下最も重大問題たる解舒がこれに由来するのであり、延いては類節からセリブレーンに及ぶのである。茲に於てか我千曲時報は又蚕を論じ、繭を究め、糸を調べるものの時報である。千曲の川は滔々として信玄、謙信の昔は更なり。遠く千古の姿をそのままに不撓の努力を寸時も止めない。流れて注ぐ水は或は四百余州の支那に、或は遠く米欧に

吾人の坐下を連繫する。我千曲時報たる又千曲の水と等しく、内外蚕糸業同人の心域を互いに連絡するものである。宜なるかな千曲時報の出現！ 重大なるかなその使命！……」と。

第1回蚕學談話会は千曲會養蚕部会主催で昭和10年2月24日午前10時から母校養蚕部で開催された。来たるべき養蚕期を控えて、講演と会員の研究発表を聞き、また養蚕業界の種々の時局問題について活発な研究論議が行なわれた。談話会はその後も適時催され、会員相互の研鑽の場とされた。＜講演＞生物變化の機構に就いて 佐藤春太郎教授。＜研究発表＞天蚕寄生蠅の一種に就いて 中沢利三郎、桑品種の三型と植付後に於ける收穫量の消長に就いて 宮城博、土質と桑葉の品質との関係 須田圭二、生糸の類節の生成に就いて 茅野功、蚕蛾微粒子病検査法の正確度に就いての考察 勝又藤夫。＜討議＞1. 技術問題 (イ)養蚕と糸質との関係 (ロ)種繭育に於ける經濟育蚕法、2. 政策問題 蚕繭処理法。

母校創立25周年記念事業

昭和10年は母校創立25周年に当たり、昭和8年11月23日の第七回代議員会では本会としても記念事業を行なうことが決定された。

母校創立25周年記念式は昭和10年10月21日午前10時から挙行された。このあとひき続き千曲會主催の記念式が行なわれ野口理事司會のもとに林理事から校長に寿像および千曲會館献納の目録を贈呈、次いで野口理事が針塚校長以下15年以上勤続者39名の氏名を読みあげ、蒲生理事長より代表針塚校長に感謝状および記念品目録が贈呈された。つづいて校長が一同を代表して謝辭を述べ式を終わった。式に出席した同窓生は431名であった。創立25周年記念式典における針塚長太郎校長の式辭はつぎのとおりであった。

創立25周年記念式典針塚長太郎校長式辭

本日 本校創立25周年記念式ヲ挙行スルニ當リ文部大臣閣下代理ヲ始メ朝野貴賓各位ガ業務ヲ差繰リ遠路ヲ厭ハズ態々本式典ニ御貴臨ヲ辱フセルハ洵ニ本校ノ光榮トシテ深ク感謝スル所デアリマス。猶本校卒業生ガ母校ヲ思フノ一念ヨリ全国ヨリ此ノ式ニ參列セル者500名ヲ突破セルハ校員一同ノ大ニ欣快トスル所デアリマス。

抑々 本校創立ノ動機ハ明治37,8年ノ戰役後國民經濟ノ振興ヲ期スルニハ蚕糸業ノ發達ヲ圖ルヲ最も適切ナリトシ斯業ノ人材ヲ養成スル高等教育機関ノ設置ヲ

急務ナリト認メタルニ胚胎スルモノデアリマシテ、裁桑養蠶製糸紡織及色染等蚕糸業ニ関スル一切ノ事項ヲ相互關聯的ニ研究シ得ル一貫の設備ノ下ニ學生ヲ教育スルヲ理想ト為シ、明治40年時ノ文部大臣牧野子爵閣下序上ノ案ヲ具シテ41年度ノ予算ニ其ノ經費ヲ計上シ、第24議會ノ協賛ヲ經42年9月位置ヲ当上田市ニ選定シテ工事ヲ起スニ至ツタノデアリマシテ、上田蚕糸専門學校ノ名称ガ文部省直轄學校ノ官制上ニ生レタノハ明治43年3月26日デ翌44年4月17日ヨリ授業ヲ開始シ、当日ヲ以テ本校記念日ト定メタルデアリマス。

本校創立ノ議一度決スルヤ長野県ノ官民諸氏ハ熱誠ヲ以テ本校ヲ歓迎セラレ創立費トシテ30万円ヲ寄附セラレ、後更ニ5万円ノ追加ニ依リ予算総額35万円ノ寄附金ヲ以テ、茲ニ本校ハ創立セラレタノデアリマシテ本校ノ創立ガ長野県殊ニ本校所在地ニ負フ所大ナルハ深ク肝銘シテ忘ル、能ハザル所デアリマシテ、當時創立ニ尽瘁セラレタル本省ノ牧野、小松原兩大臣ヲ始メトシ沢柳次官、真野実業學務局長、久留、柴垣兩建築課長及佐々木、三吉、朝比奈、本多、吉武ノ各創立委員並ニ地元ノ中島委員長、石田上田町長、工藤、南条兩衆議院議員、馬場、細川、本多、関、県會議員其他ノ各閣下及各位ノ御芳名ト共ニ之ヲ校史ニ特筆シテ永ク報謝ノ意ヲ伝フル積リデ有リマス。

本校創立當時ノ学科ハ養蠶科及製糸科ノ二科デアリマシタガ、大正八年五月當時ノ會計課長タリシ山崎現農林大臣閣下ノ御尽力ニ依リ絹糸紡績科、即チ現在ノ絹紡織科ヲ増設シ茲ニ創立当初ヨリノ希望タル蚕糸紡織駢進ノ計画ヲ実現シ、更ニ昭和6年4月製糸教婦養成科ヲ増設シマシタ。

本校ノ敷地ハ創立當時ノ2万6千坪ガ3割増ノ3万4千坪ト為リ、建物延坪數ハ創立當時ニ比シ現在三倍余ト為リ5千坪ニ達セントシテ居リマス、猶創立以來ノ經費ハ累計約5百万円デアリマス。

大正3年以來ノ本校卒業生ハ本科1369名、選科178名、教婦養成科34名、合計約1600名デアリマス、而シテ此等卒業生ノ主ナル就職先ハ養蠶科ハ官庁及學校、製糸科ハ製糸会社及官庁紡織科ハ紡績会社及官庁等デアリマシテ、内地ノ3府43県ハ勿論、朝鮮、滿洲、中華民國及米國ニ散在シテ夫々専門ノ業務ニ従事シ漸次相当ノ地位ヲ得テ実社会ニ活動シツ、アリマス。

現在ノ本校々員ハ教授16名、配屬將校1名、助教授8名、講師12名、助手1名、書記6名、雇員31名、教婦5名ニ小官ヲ加ヘテ合計84名デアリマシテ外ニ嘱託7名及傭人ノ75名トガアリマス。

學生ノ現在數ハ養蠶科98名、製糸科91名、紡織科50名、選科24名、研究科1名、教婦養成科37名、合計301名デアリマス。

顧レバ明治43年8月、不肖非才ヲ以テ敢テ校長ノ職ヲ演シ引續キ今日ニ及ビマシタガ、此ノ間教養上幾多ノ過失アリシニモ拘ラズ、幸ニ校運ハ年ト共ニ漸次進境ニ向ヒ大正4年4月ニハ

山階宮芳麿王殿下ノ御台臨ヲ辱フシ、大正8年7月7日ニハ

皇太子殿下トシテ、今上陛下ノ行啓ヲ仰ギ、畏クモ玄関前ニヒマラヤ杉ノ御手植ヲ辱フシタルハ洵ニ本校ノ無上ノ光榮トスル所デアリマス、猶卒業生ノ就職率ハ年ニ依リ多少ノ隆替アルヲ免レザルモ近來、世ノ就職難ヲ余所ニ年々百パーセントナルハ深ク校員一同ノ欣ブ所デアリマス。

是レ偏ニ、外ニ在リテハ官公衛學校長及実業界ニ於ケル有力者各位並ニ地元各方面ノ篤キ御同情ト甚大ナル御援助ノ賜物タルト同時ニ、内ニ在リテハ校員諸君ノ全部ガ和衷協同シテ献身の職務ニ精勵シ、熱誠以テ陰ニ陽ニ小官ヲ庇護セラレ、學生諸子亦克ク校規ヲ遵守シテ其ノ本分ヲ勉メ、本校教育ノ趣旨ニ添ヒ又同窓生諸君ガ母校ノ声誉ヲ重ンジ、克ク其ノ職務ニ尽瘁シテ間接ニ本校ヲ援助セラレタルニ依ルモノデアリマシテ小職ノ常ニ感謝スル所デアリマスガ、此ノ機會ニ於テ改メテ深甚ノ謝意ヲ表スル次第デアリマス。

本日茲ニ創立25周年記念式ヲ挙ゲマシタノハ25年ハ正ニ人生ノ半ニ相当シ、事業ノ一段落ト為ルモノナレバ過去ヲ省ミテ将来ヲ期シ、更ニ新ナル気分ヲ以テ第二期ニ入ラントスル吾々ノ覚悟ノ聲明ト見レバ、敢テ無意義デハナイト信ジマス。

今ヤ我國ハ千古未曾有ノ非常時局ニ際会シ國民ハ此ノ非常時ヲ突破セントシテ、端無クモ我國ヲ日本本來ノ姿ニ立チ還ラシメ、以テ万邦無比ナル我國體ノ基礎ヲ愈明徴ニシハ紘一字ノ建国ノ大理想ニ向ツテ、着々邁進シツ、アリマス、我々蚕糸紡織業ニ關係スル者モ徒ラニ人網ノ圧迫、世界の不況等ノ為ニ辟易スルコト無ク、大ニ蚕糸業本來ノ特色ヲ研究シテ其ノ利用ト發揮ニ努メ斯業ノ全体ニ亘リテ技術の並經濟的ニ余蘊ナキ研鑽ヲ積ミ以テ斯業ヲ安定ナラシメ、進ンデ全世界ニ雄飛スルノ計ヲ立ツベキ機運ニ際会シテ居ルノデアリマス、此ノ時ニ當リ本校モ25周年ヲ一期トシテ、更生ノ意氣ヲ振起シ益々内容ヲ改善充實シ、斯學ノ研鑽運用ニ精進シテ斯業ニ有能ノ材ヲ供給シ以テ國家ガ本校ヲ創立セル趣旨ニ応ヘ社会ノ期待ニ添ハンコトヲ期

スルノデアリマス、從テ本日此ノ式典ニ御賓臨ヲ辱フセラレタル各位ノ深厚ナル御援助ト御同情トヲ仰ガナケレバナラヌコトガ今後益々多大ナルヲ痛感スル次第デアリマス、庶幾クハ本校ノ為ス業ノ為将邦家ノ為更ニ一層ノ御同情ト御援助ヲ賜ハランコトヲ。

終リニ臨ミ重ネテ閣下貴賓ノ清臨ヲ辱フシタルコトヲ感謝シマス。

之ヲ以テ式辭ト致シマス。

社団法人千曲会

同窓会の社団法人化は昭和4年の第三回代議員会で提案され、鳳陽会（山口高商同窓会）、茗溪会（東京高師同窓会）、帝国公民教育協会、大日本蚕糸会その他産業組合、同業組合の定款をもとに調査研究し、社団法人千曲会定款草案が作成された。昭和5年11月23日、第四回代議員会が開かれ、満場異議なく社団法人設立を決定、昭和7年7月から同窓会は千曲会と改称された。

社団法人千曲会は昭和15年8月23日に認可され、同年10月26日、皇紀2千6百年並びに母校創立30周年記念式と日を同じくして第一回総会が開催され、15支会より62名、在校会員26名が出席した。

新役員は理事長に蒲生俊興ほか理事14名、監事5名、評議員30名が選出された。また従来の千曲時報は「千曲会報」と改題された。

社団法人千曲会の誕生とその使命

千曲会理事長 蒲生俊興

吾が千曲会は会員相互の親睦を厚うし、併せて本邦蚕糸業並びに繊維工業の改良発達を図るを目的として去る8月5日附を以て農林省より社団法人組織の認可指令を受領し、同時に8月23日上田区裁判所に於て無事その登記を相済ませ、茲に芽出度社団法人千曲会が正式に誕生した次第である。会員1910名を擁する吾が千曲会は多年の宿願が叶って愈々法の認むる一人格と権能とを賦与せられ、茲に堂々たる公益法人としてその強固なる基礎に立って益々一致団結し、所期の目的達成に邁進せねばならぬ次第である。時恰かも輝かしい皇紀2千6百年に際し、又聖戦第4年の時難克服途上に當って期せずして本会が茲に組織体制を固め、全く面目を一新するに至ったことは本会にとっては寔に不朽の一大記念事たると共に、その使命の愈々重且つ大なるものあるを惟はざるを得ない。

抑も本会は大正3年母校第一回卒業生の輩出以来、上田蚕糸専門学校同窓会として囀々の声をあげてより

茲に20有7星霜を閲し、爾來年を追うてその会員数を増加し、今や當に養蚕科772名、製糸科741名、絹紡織科288名、教婦養成科109名、総計1910名の隆盛を見るに至り、各会員は夫々本邦蚕糸業はもとより紡織及び人絹業の各官衙学校及び会社等の諸相に奉職し、各その持場に於て職域奉公の誠を尽しているのである。曩に本会は定款に基き第一回総会を開催し、本会役員の改選を行なつて新進の士を抜擢し、尚最近理事会に恰ては本会事務の分掌を協議して新体制を樹立し、庶務、経理、文化、会報、企画、人事及び情報の各部を設け、於かも蚕糸業の一大転換期に際し、本会の負へる責務の完遂に愈々邁進せんとする次第である。

尚從來本会が刊行し來つた千曲時報は上司の命によりて千曲会報と改題し、そのタイプを改めて本新年号より発刊することとなり、本会々員相互の連絡機関として愈能率を発揮したい考えである。会員諸兄に於ても幸いに之を諒とせられ、益々本会のため御助勢賜わらんことを冀つてやまない次第である。終に臨み、本会社団法人認可申請に対して特に多大の努力を払われた高島秀男氏、久保書記並びに前理事者各位に対し深甚なる感謝の意を表する次第である。

ときに時局はいよいよ緊迫し、学園また新体制となり、同窓会活動も戦局の赴くところ、ついにその機能を停止するところとなった。

繊維化学科新設期成同盟会

人造繊維時代の到来によって時代的要請に応じて繊維化学科の新設を実現させるべく同窓会内に期成同盟会を作つて猛運動を展開した。

千曲会報の再刊

千曲会唯一の報道連絡機関としての千曲会報は戦局のいたすところ昭和19年1月25日発行の第36号をもって廃刊とされたが、終戦となり、昭和22年9月1日に第37号が再刊された。

＜千曲会報の再刊に就いて＞本会報は30有余年にわたり会員唯一の報道連絡機関として多大の役割を果たして來たのでありましたが、戦争の犠牲となり、遂に昭和19年1月25日の会報を最後として廃刊の已むなきに至りました事は誠に遺憾でありました。一昨年終戦以来一日も早く再刊して会員諸君の御期待に添ひ度いと当事者一同念願して参りましたが、経費及び資材に制約せられ今日に及んだ次第であります。併し新日本建設に重大役割を負う繊維産業に直接接間に関係を有

つ多数会員を擁する本会と致しましては会員相互の強い団結と緊密なる連絡こそ繊維産業の復興に又母校の発展に寄与する処極めて大なるを痛感し、昨年11月の代議員会の決議に基き、万難を排し茲に久振りに親しみ深い会報の再刊を実現し得た事は誠に欣快とする処であります。材料其の他の都合で充分の内容を有つとは申されませんが、順次内容も豊かにし、1年に4回位は刊行したいと努力して居ります故、会員諸君も真に自分等の会報と言う御心持で御援助御指導下さる様御願すると同時に会報を通して会員相互の交歓に資する事が出来ます様充分御利用下されば幸と存じます。

(千曲会理事長 中沢 忠)

母校大学昇格運動

1. 本校単科大学昇格運動の趣旨

繊維産業が我国経済上に占める地位と使命とから観て其進歩発達を図るために此際重点的に且早急に繊維に関する最高の教育と研究とが出来る独立の繊維大学を設置することは新日本建設の途上実に緊要なことと思う。

今回の画期的学制改革期に際し、本校年来の宿望であり又輿論である本校の単科大学昇格を念願し現在の機構性格を替えることなく而も将来の発展性に富む独立の繊維大学への昇格を志し其目的達成によって国家のため又斯界のため大に貢献すべく其実現に最大の努力をなすことが本校に職を奉ずる者並に関係者に課せられた義務であり又責任であると信じ、ひたすら其目的貫徹のために勇往邁進しようと決意したのである。

2. 前半期に於ける昇格問題の経過

新制大学案の発表されたのは昭和21年の秋末であったがそれが国立学校設置法として国会を通過したのは本年5月であったから約2年半で法律化したのである。此処には便宜上23年2月迄を前半期とし其後を後半期として大学昇格問題の経過の概要を述べようと思う。

新学制案の全員が略判明したのは22年2月であったが本校では此月に新学制対策委員会を設け其翌3月には本校大学昇格期成同盟会が結成された。其後直ちに趣意書の作製、陳情、昇格費の調達などに着手したのであるが6月初迄の間に林長野県知事、森戸文部大臣、G・H・Qなどに本校の繊維大学昇格について陳情した。

同年6月以後長野県内の高等専門学校長会議官立農林水産専門学校長会議、官立3繊維専門学校長会議等が次々と度々開かれ大学昇格問題に関する情報や意見の交換を重ねた。長野県内高等専門学校長会では6月

に総合の信州大学設立の建議案を知事宛に提出したが内容は学校差もあるから最初は単独昇格を認め2次的に総合大学を結成する趣旨のものであった、此案は其後県当局や信濃教育会等でも検討されたが何分にも土地広く交通不便な長野県の各地に散在する各学校を一つの総合大学に統合することは甚だ無理であると云う理由で23年2月迄は遂に具体化するに到らず寧ろ各学校の単科大学昇格論の方が輿論的であった。

官立農林専門学校長会議も再三開かれたが文部省の方針が容易にきまらないために学校側の態度をきめることも出来なかった。

3繊維専門学校長会議では22年5月次の2つの協定を結んだ。

1. 現有の5科を含む独立の繊維大学昇格を期して互に共同戦線を張ること。

2. 昇格費の共同募金に關すること。

3. 後半期に於ける昇格問題の経過

23年3月10日全国高等専門学校長会議で文部省から始めて新制大学の具体案が示され且次の内容の指令があった。

1. 経費の節約上成るべく単科昇格を避け総合大学、連合大学等を結成すること。

2. 成るべく科の数を減じ教官は1/2割費用は5割増加の程度で立案すること。

然るに各学校の態度は文部省の希望に反し現在所有の科の数をへらすことなく単科昇格を望む案が大半であった、かくては新制大学案の実施も覚束なしとし遂に一県一大学主義が生れ且科の数も制限されることになった。

3. 3繊維専門学校では同年4月初に代表者会議を開き前年以来共に主張して来た5科単科大学昇格案を解消し科の数や総合と単科の何れを選ぶも各校自由となった。

長野県内の事情は既に前年来立消の総合大学設置案が文部省の恣意によって23年3月に到り再び擡頭し本校を除く県内7高等専門学校の意見は1信州大学の設立を望み県当局も亦此案を支持したが4月14日県当局主催の大学設置準備委員会で本校の単科昇格の主張が認められ県としては信州大学と繊維大学との2本建て進むことに決定した、又4月、6月及び11月の県議会で本校の単科大学昇格のことが3度確認議決された、尚同年6月には長野県選出の参衆両議員一同の会合の席上に於て此事が議決された。加之県民全体の輿論は時日の経過と共に高揚し遂に24年3月10日に県民大会

が開かれ熱狂的に論議され更に翌11日と12日の両日数十名の県民が大挙上京して陳情した。

中央に於ては本校の単科昇格請願書が23年5月に参議院で7月に衆議院で採択されて全国的に支持されるに到った。

新制国立大学設置に関する所謂11原則は23年7月に制定され其後1部を修正されたものであるが其中に1県1大学の項があり又1総合大学内の学部は他県に跨ることが出来ないとか、国立新制女子大学を東西2箇所設ける等の項目もある、本校が単科昇格を望む主な理由は繊維大学設立の必要性地理的關係、信州大学参加の利害、将来の発展性、東京京都両繊維専門学校との比較等の各項に亘るものであるが文部当局は常に11原則を楯に取り例外を認めるためには本校の理由が尚薄弱であるとなし本校や国会の認めた意見とは全く対立した、然るに本校の主張は遂に23年10月に森戸文部大臣の容れる所となり本校の単科大学昇格申請が大学設置委員会に諮問されることになり単科昇格の前途に1大曙光を認め得るに到った。此月に内閣の更迭があつて下条氏が文部大臣に就任された。本校が大学設置委員の現地視察を受けたのは2ヶ月後の12月であつたが其結果は単科大学としても昇格し得る資格が認められ尚下条文部大臣の支持もあつたので本校の単科昇格には略確実化したかの感があつた、然るに本年2月再び文部大臣の更迭があつて高瀬文部大臣が就任された。かく本校の昇格運動の途中1度ならず2度迄も文部大臣の更迭があつたことは極めて不運の現象と云わねばならぬ。大学設置委員会に於ける各学校の審査は3月半頃迄に終了したのであるが本校は文部省案の総合大学参加を拒否した理由で秋田敏専等と共に該委員会に附議されずに保留となつた当時の文部当局の意向は大挙陳情した長野県民代表者との問答で其大要を知ることが出来た。代表者の所論中文部当局が首肯したと思われる主なるものは

1. 11原則は修正し得るものだが女子大学を2校までも認めて繊維大学1校すら認めないのは不合理で修正洩れである。
2. 1県1大学の例外として数県を指定してあるが長野県は此等の県に劣らぬ高等学校を持って居るから例外中に入れて然るべきだ。
3. 文部省は兎角3繊維専門学校を画一的に取扱はうとして居るがそれは互に事情が違ふから妥当でない。
4. 本校は独立しても総合大学に参加しても費用の上には殆ど差がない。

此等の主張に対して文部当局は従来の態度を改め、若しC I Eで認めるか或は国会で議決すれば本校の単科昇格には敢えて反対しないと折れて来た。それで以後は専ら此方面に向つて対策を講ずることになり其ための運動は新制大学法案が衆議院を通過した5月18日迄活潑に継続した。

4. 本校昇格問題の結末

C I Eの方は此事に関する限り文部省と大学設置委員会とに一任してあると云つて居り此事は文部省の新制大学の実施についてと題する文書にも明記されてある。

大学設置委員会の方は本年1月以来文書其他の方法で陳情に努めて居たが不幸にして本校を審査する直前の4月下旬に委員の改選があつて委員の大半が更迭したことは本校を認識する委員の減少を意味するもので本校には非常に不利であつた。

議会関係は或は参衆両院に対する質問書の提出や、再請願、又民自党の本校単科昇格承認等のことがあり文部大省は遂に4月下旬に本校や秋田敏専等の単科昇格の可否を大学設置委員会に諮問することになった。其諮問の方法は全部異例で元來資格審査を性格とする設置委員会に対し、文部省自体が定むべき範囲の政策的のことを諮問したのである、之に対し設置委員会は答申書と審査報告書とを提出した答申書の方は本校の単科昇格は11原則の1県1大学主義に反するから総合大学に参加するを可とし審査報告書の方は総合大学の1学部としても亦単科大学としても共に資格があるとしたので資格的には単科昇格が可能であるが政策的には総合大学参加が妥当であるとしたものである。

(千曲会報No.39 昭和24年10月20日発行には上記のような昇格運動の顛末が詳細に報告されている)

創立50周年記念式典

創立50周年記念式典は昭和35年10月20日から1週間にわたつて舉行された。この記念事業は千曲会として3年前から計画にとりかかり、母校50周年記念事業実行委員会が設置され、猪坂直一が委員長に推された。また地元でも官民一体の記念事業協賛会がつくられ、長野県、上田市、上田商工会議所、東信地方各市町村等の協力をはじめ、母校学生、全国関係業界、地元各種業界、上田市全自治会等、この種の記念行事としては殆んど類例を見ない広範な協力によって、文字通り空前の盛況裡に開幕された。

初日の記念式参列者は実に1200名を越え、当初予定

した講堂では間に合わず、急遽運動場に天幕張りの会場を設営する有様、千曲会員参列者も700名におよんだ。

記念事業種目と経費は、(1)財団法人上田繊維科学振興会設立250万円。(2)千曲会施設拡充実費60万円。(3)祝賀行事費100万円。(4)会議費事務費及び交附金等90万円。

募金目標額 500万円。個人募金基準額、大正3年～昭和7年卒業生5000円以上、昭和8年～同10年4500円以上、昭和11年～同13年4000円以上、昭和14年～同16年3500円以上、昭和17年～同19年3000円以上、昭和20年～同22年2500円以上、昭和23年～同25年2000円以上、昭和26年～同28年1500円以上、昭和29年以降1000円以上。

創立50周年記念式典

小泉清明信州大学繊維学部長式辞

本日ここに信州大学繊維学部創立50周年記念祝典を挙行するにあたりまして、文部大臣代理官殿をはじめ県内、県外から多数の来賓ならびに同窓生各位の御臨席を得ましたことは本学部のまことに光栄とするところで深く感謝の意を表する次第であります。本学部の歴史を顧みますに前身上田蚕糸専門学校は日露戦役後疲弊した国民経済を復興させるには蚕糸業の発達を期する以外に途なしという当時の政府ならびに地元有識者の要望に答え、斯業の高等なる学術と技芸を教授する目的を以て明治43年3月26日現在の学部の位置に創立されたのであります。当時の学科は養蚕製糸の二学科でありまして、初代の校長には識見手腕ともに卓越し、事実上本学の基礎築かれた針塚長太郎先生が就任されました。学校は大正8年に絹糸紡績科を増設し、これによって蚕糸業については栽桑、育蚕、製糸、紡績、織染等生産から仕上げまでの一貫した体系をたてることができるようになりました。しかるところ、大正年間には人造絹糸昭和にはいってからは化学繊維の出現があり、学校はこの繊維業界の革命的な事態に対処するため昭和15年にはさらに繊維化学科を増設いたしました。かくて蚕糸業一辺倒であった学校の内容は新興繊維をも加えて繊維全般の研究と授業とに拡大されたのであります。これよりさき昭和12年には創立以来の功労者針塚先生は高齢の故をもって退職せられ、蚕糸化学の権威井上柳梧先生がその跡をつがれたのであります。繊維産業の新らしい動向への基礎づけは同先生によって一層確立したのであります。しかしその後第2次世界大戦の勃発によって学校の使命にも多

少の変更を余儀なくせられ、ために校名は上田繊維専門学校と改められて、東南アジア開発の使命をも考慮し、新たに繊維農業科が設置せられ同時に養蚕製糸両科は合併して蚕糸科になりました。大戦終結の年昭和20年11月には井上先生は勇退せられて現信州大学長伊藤武男先生が第3代校長に就任せられるにより再び蚕糸科はもとの養蚕製糸の2科に分離いたしました。

昭和24年7月にはわが国の学校制度に根本的な改革が行われ、総合信州大学の発足にあたって、長い歴史と伝統を誇ったわが上田繊維専門学校も遂にそのゆいしある校名に別れを告げて信州大学繊維学部として再出発することになりました。当時の学科は養蚕学科、製糸学科、紡織学科及び繊維化学科の4科でありまして、これに一般教養部の分室が認められて現在に及んでいるのであります。初代の学部長には伊藤武男先生が就任されましたが昭和33年8月信州大学長に榮転せらるるに及び第2代学部長には林貞三先生が選任せられ35年4月同先生が停年退職せられたあとを、不肖小泉清明がおそって現在におよび今日のよき日を迎えることが出来たことは身に余る光栄と存するところであります。

以上が50年に及ぶ信州大学繊維学部の沿革の概略であります。特にここに明記して感激の意を表さねばならないことは、皇室の蚕糸業及び繊維産業に対する深い御関心のことでありまして、わが校は天皇陛下を初め多数の皇族方の数次にわたる御来学の光栄に浴しているのであります。すなわち昭和22年10月には天皇陛下の御来学を賜わり、親しく校内を御視察の上種々御下間をいただきました。続いて24年6月には皇太后陛下、28年8月には三笠宮及び同妃殿下、翌29年には高松宮殿下の御来学御視察を賜わって本校の歴史に光輝ある一頁を加えたのであります。

以上の如く本学は人間生活に不可欠の要素“衣”のための繊維の教育と研究を信条として今日まで半世紀の歳月を歩んできました。その間学校の内容も外観も次々と変り漸進的にではありますが新しいものが古いものに置き換えられてまいりました。今日われわれのもっているものは創立の時にもっていたものとは根本的に変わっているのであります。50年の歳月は決して短くありません。現在学内旧本館の前と生物学教室のそばにいていとそびえている2本の樺の大木は創立当時針塚先生が大星河原から実生の苗木を移し植えられたものと聞き及んでいますが、これらの大木を仰ぐ度に当時の先生のおもかげと50年の長い星霜を想起する

のであります。

明治43年当時の建物の総延数1605坪は今日では6712坪となり、敷地も25755坪が70352坪に拡大されております。当時の職員数35名は現在150名に、また学生も当時の270名が500名にふえております。設備についても今日われわれのもっているものは当時の誰も想像しえなかった進歩したものであります。すべてに隔世の感があります。このような学園進歩のあとは人類の思想や科学の進歩の一つの縮図でもありましょう。本校はかくして創立以来5千名をこえる卒業生を実社会に送り、それぞれその職域にあって社会に貢献しております。

しかしわれわれをして今日あらしめている根本的のものは何か。云うまでもなく学内外の前人の植福とその上に築かれた伝統の結果であります。すなわち文部省を初めとする農林通産等の政府各省、地元の県や市町村、実業界の有力者各位のあつい御同情と心からなる後援の賜であると同時に、内にあっては歴代の学校長学部長はもとより教官ならびに事務系職員全諸君の和衷協同して職務に精励されたこと、また学生諸君よく校規を守って勉学にいそしんだ結果であることは言をまたないところであります。さらにまた5千有余の本学に学ばれた卒業生各位が在学中に築かれた真面目な愛校の伝統が直接間接に本学の振興に寄与しているところ絶大のものがあります。50年の祝賀の日を迎えてわれわれは切にこの事を想い感謝の念にたえないものがあります。

しかしわれわれもまた福を植えてこれを次の世代に送らねばなりません。科学や技術の諸関係が常に改善され進歩するものとすればわれわれの意識は伝統を導びながらもこれを批判し受入れられているその中で、何が将来の学校の運命の開拓に対して有益であるかを察知し、それに従って移り変る時代の精神と事実とに適応する学校の性格の形成に力強く踏み出していく必要があります。この意味におきまして学部は今般既存学科の根本的な改組拡充と繊維機械学科の新設を計画しその実現によって新しい時代にふさわしい教育研究機関とし、ますます国家社会の付託に答える覚悟であります。ねがわくは本学部の熱意を御理解の上今後共本学部の発展のために格別の御援助を賜わらんことを。

終りに臨み来賓各位のますます御健勝ならんことを御祈りいたします。以上過去を想起して御礼を申し述べるとともに将来への決意をひれぎして式辞といたし

ます。

昭和35年10月20日

母校火災復興資金募集

37年3月12日に次の様な趣意書がひきあがった去る

1月26日吾々千曲会員が学び舎として過去半世紀の間お世話になってきたなつかしい大本館が不慮の火災にあってしまいました。まことに残念であり、在勤会員としておわびの言葉もありません。原因は警察当局の懸命な努力にもかかわらず今もってわかっていません。

学部改新が実現の第一歩を踏み出した矢先この災難が改新速度をおくらせるのではないかと憂えているのであります。新設大学がいろいろな方面から再検討されているとき、一日も早く母校の復興を致さねばバスに乗りおくれしてしまいます。それには母校職員は勿論吾々千曲会員もともに熱意を披歴して当局に復興改新の早期達成を働きかけねばなりません。幸にして去る3月11日の緊急総会において全会一致、表題および別記の通りの募金方針が決議され、総力をあげて復興資金の募集をすることになりました。

会員各位には想い出の学び舎であり、相ついで集まる後輩のため、また可愛いわが子、わが弟のため立派な再建、改新ができるよう万難を排して御協力下さらんことを切に切に御願ひする次第であります。

既に母校在勤の会員各位は全員積極的に抛出、協力下され、また支会員においても相ついで拠金を申出しています。ここに母校の復興が切実緊急を要することを訴え各位の絶大なる御協力を御願ひして御挨拶と致します。

昭和37年3月12日

母校火災復興資金募集実行委員長 巢山 喜吉
社団法人 千曲会 理事長 荻原 清治
会員各位

記

募金予算額

母校火災復興資金募集予算額	5,400,000円
火災復興資金として母校へ提供する金額	
	5,000,000円
募金経費	400,000円

財団法人上田繊維科学振興会の設立

信州大学繊維学部創立50周年記念事業は昭和35年10月20日盛大に挙行されたことはまだ記憶に新しいこと

であるが、祝賀事業のうち将来にのこすべき大事業として研究の奨励および助成を行なうとともにさらに学術を通じ広く社会と大学との接触をあっせんし、文化の向上と繊維産業の発展に寄与することを目的として上田繊維科学振興会が設立された。

長野県および上田市を初め、業界繊維会社等293社、繊維学部教職員、千曲会員、在学生延2,712名、上田市自治会員269名計3,276名の協賛を得て設立された信州大学繊維学部50周年記念事業協賛会からこの事業に対する寄付金3,000,000円を基本金として生ずる利子によって事業を運営し、昭和36年度より任意団体とし発足した。

この間主な事業は昭和36年度において繊維関連学会討論会講演会開催に補助すること6回、昭和37年度において研究助成3件、講演会開催3回に補助をなし着々その成果を挙げている。そこでこのさい一層その基礎を固め、公益の増進に寄与するため任意団体振興会を発展的に解散しそのいっさいの事業を継承し、基本財産の電信電話債券3,400,000円より生ずる果実によって運営する、財団法人上田繊維科学振興会を設立することを計画し、昨秋来発起人会によって研究され本春長野県に設立許可申請中であった。7月15日付設立許可され、7月29日諸般の登記を完了した。かねて所望であった財団法人上田繊維科学振興会がここに目出度く発足することになった。運営する事業量は敢て大きいものではないが盛りあがる研究と成果に対し事業目的を充実遂行し将来の飛躍的發展隆昌を期待するのである。(昭和38年7月29日)

信州大学の一般教養課程の統合に対する運動

昭和39年11月23日開かれた第25回総会の席上に行なわれた一般教養の統合問題について討議が行なわれた。千曲会報№150の誌上には次の記事が見られる。

現在信州大学では、松本、長野および上田においてある「一般教養課程を松本地区一カ所に統合」しようとする計画が強引に進められている(本誌香山氏論説参照)が、昨秋11月23日の千曲会総会で上小支会から緊急動議が提出され、これについて本会は慎重に討議を行なったが、その結果、学校としてはまだ結論が出ていない時ではあるが、千曲会としては「この計画が実施されると、著しく上田の大学の特色が失われるし、新しい学科の増設や、大学院の設置をみたばかりの、大改新の途上にある母校にとってまことに容認しがたい重大な問題で、上田から一般教養を引上げられるこ

とは絶対反対であるとし、千曲会総会の名において下記のような決議を行なった。なおこの決議書はその後、信州大学長と繊維学部長に提出し善処方を要望した。このため副理事長母袋忠右衛門、和田晋、箱山佳夫、香山清和、浅野清志の各氏同窓生幹部が松本に出張、三村学長不在のため杉田事務局長に面会決議文を提出した。つづいて松本市長その他の関係者へも申し入れをした。

決 議

現在信州大学の一般教養課程を松本地区一カ所に統合する計画が進められているが、これは母校にとっては、従来の歴史的事実を無視するものであり、繊維産業教育の面において、また母校の将来にとり著しく不利を招くことになるので絶対に反対である。

以上決議する。

昭和39年11月23日 社団法人千曲会総会

また、統合問題は「教養統合参加」と結着がついたが当時の理事長山口定次郎氏は次の文章を会報№154(昭和40年7月1日)に載せている。

母校繊維学部は両三年来「信州大学一般教養課程松本一ヶ所に統合」の可否について慎重に討議を続けましたが、賛否両論があって容易に方向は決定することができませんでした。

一方千曲会は昨秋の総会において上小支会より提案の緊急動議にもとづき「繊維学部の教養課程を統合されることは、母校の教育面において大いに支障あること、また大学発足当時の歴史的事実を無視するものであることをおもな理由として統合反対」の決議を行ない、千曲会の意志を表明した次第であります。

なお、この決議の実行については理事会に一任されましたので、理事会は学部の立場を考慮しつつ慎重に行動いたしました。

母校はさらにいくたびか審議を継続いたしました結果、3月31日に「現時点においては教養統合に参加」ということに、票決により決定いたし、一応千曲会の目的は達せられたかにみえましたが、その票差は一票でありました。その後5月末にいたり、信州大学および文部省などの「新事態」とも称すべき事由が判明いたし、信州大学全体ならびに繊維学部自体の発展のためにも、先の決定は急遽再検討を必要とするという事情に立ちいたり、学部は慎重に、検討を重ねましたが、6月7日教員会議において最終的票決をいたしましたところ、今回は方向は逆転して「教養統合参加」ということになりました。事情の詳細については学部長の本誌掲載報告のとおりであります。

従いまして誠に遺憾ながら昨秋の千曲会総会の決議は、われわれの微力をもってしては、その目的を達成するあたわず特に学内にある理事一同は誠に面目もなく、その責任を痛感しているところではありますが諸般の事情ご賢察の上、会員各位のご諒承をえられれば望外の幸であります。

以上繊維学部が「信州大学教養部参加」にいたる経過の概要を申し述べて報告といたで併せてご諒恕をえたいと存じます。

蚕糸教育改訂問題

昨年の今頃を中心に、いくたびか、学の内外において論議を戦かわせ、審議を重ねてきた蚕糸教育統合改訂の問題は、その後どうなっているか？、という質問を卒業生や、業界の人々からしばしばうけるし、とりわけ母校の消息をわが事のように心に懸けておられる同窓生は、ひとしく同じ心境であると思われるので、いつかははっきりしたお答えをしたいのであるが、しかし、これについては大学としてもまだ一般に対し説明できるような段階にはなっていないようである。従って本紙では、近況の概要を報告しご諒承をえたいと思う。

実は大学は、本春から、来年度予算編成に備えて、概算要求を出すべき時期が来ているので、これに関連して、文部省は蚕糸繊維関係大学の学長に、学長は学部長にあて、それぞれ回答を求められた。すなわち「昨年末までに2—3回、蚕糸教育問題について、関係大学の学長、学部長または関係教授らを招集し、文部省の意向を説明し、大学側との意見交換を行って来たが、いまだ決定にいたらない。然し文部省は、できるだけ原案にそって統合実施を考慮してほしい。その後統合に対する大学の方針はいか様に進んでいるか？、文部省は来年度の予算に盛込みたいので、方針を回答されたい」とのことであった。

これに対し、母校の将来計画委員会（委員長野口新太郎教授）は、すでに慎重に検討して来たことであるが、更に審議を加え、去る6月17日の教官会議にもはかり、あとに述べるような一応の結論をえた。

さてそこで、もう一度文部省の提案のあらましをかいつまんでみると「蚕糸業は現在、日本のみならず、

世界的に特殊な重要な産業であって、その研究教育、後継者の養成は極めて肝要である。その教育機関は、現時点からみて、工学部化しつつある三繊維関係学部門に散在させたのでは貧小となるおそれがあるので、設備の強化拡充のためにも蚕糸の一貫教育を一大学において行うのがよく、そのためには、生糸の製造までは農学とみるべきであるから、農学部の中で充実した学科として結集するのがよい、統合した教育機関をどこにおくかは、当事者間でよく検討するのがよい」ということであった。これに対して信大繊維学部では「期待される理想的な蚕糸教育が実現できるなら統合してもよい」としてあったし、東京農工大も「できれば絹糸加工学を含めて蚕糸学部がよいのだが、立派なものなら、農学部内の一学科でもよい」ということであった。然し京都の繊維学部は「統合は蚕糸教育を強化させず却って貧弱にさせる故に全面的に不賛成である」という主張を堅持している。従って京都繊維の不参加という一つをとってみても統合時期は尚早であり、その外にも難点がみられるようであり、これらを見無視しての統合案は全く不自然のものであるという意見が最近強まっていた。

結論としては、「上田の繊維学部は理想的な蚕糸教育統合計画案には前向きに賛成であるが、今日考えられているような一部統合で一学科を形成するという程度の、理想に程遠い統合案には賛成できない。今後も更に研究を要する」という事で万場意見が一致し、回答を学長に提出してある。

以上の様な状態にあり、良識ある文部省もその後の大学の在り方を考慮したり、蚕糸業を含めて社会全般の諸情勢の変化なども勘案し、総合し、あまり無理な改新を計画したり断行したりはしないと思われる。加えるに長い伝統、歴史、殊に数多くの業績との関係、業界の要望、地方産業との関係などをも無視してまで、特徴あるものを霧散させてしまうようなやり方はあまり賢明であるとは思われない。

然しながら、いづれにしても、上田の繊維学部としては、今後の在り方も大きい課題となっているので、更に慎重に検討を続けねばならない重大問題であろうと考える。

（編集部）

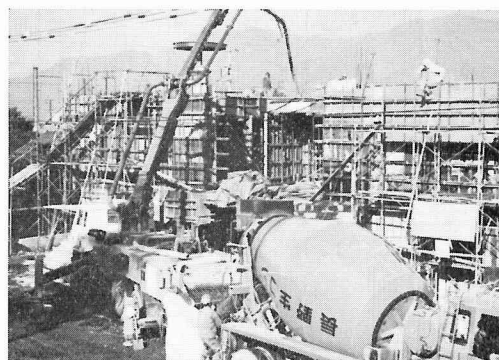
（千曲会報No.162 昭和41年8月1日より）

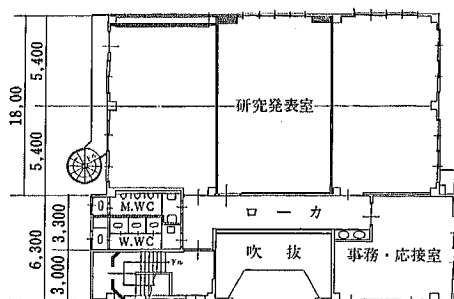
信州大学繊維学部創立70周年記念千曲会館建設経過

昭和

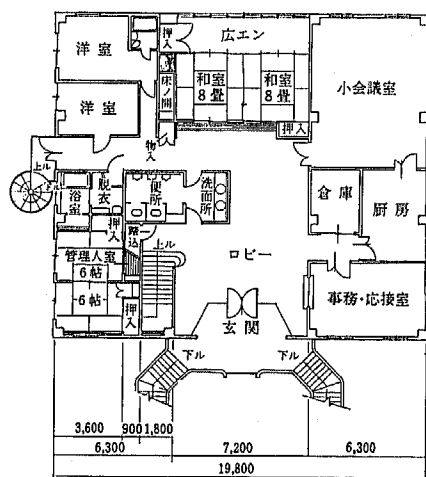
- 50.11.23 第36回定期総会に、地元上小支会から同窓会館建設促進について提案され、理事会で検討することになった。
- 50.12.27 同窓会館建設促進委員会が組織され、11名の委員が委嘱された。
- 51. 1.17 会館促進委員会開催。委員長に宮下力を選出する。
- 51. 4.12 会館建設促進委員会開催。
- 51. 4.13 笠原義人千曲会副理事長ほか長野県水口米雄教育長に会い用地の件陳情する。
- 51.10.21 会館建設促進委員会開催。
- 51.11.23 第37回定期総会において、母校創立70周年記念事業について、母校周辺に適地を求め、新しく同窓会館を建設し、同窓会と母校の発展を期すべきであると決議する。
- 52. 2.12 常務理事会・会館建設促進委員会合同会議開催。用地入手の見通しがついたため、用地買収のための推進委員会は発展的に解消することになった。今後は70周年記念事業準備委員会を設立して活動を進めることになった。
- 52. 4.14 記念事業準備委員会開催。土地、建物、募金についてそれぞれ分担委員をきめて推進することに決定。
- 52.10. 8 理事会開催。母校創立70周年記念事業募金について募金目標額を1億1千万円と決定した。
- 52.11. 5 理事会開催。70周年記念事業の建物の規模について2階建、坪当り34万円総額7千万円とする。募金額については卒業年次別に段階2万、2.5万、3万、2万、1.5万とする。実行委員は会員50名につき1名の実行委員とし支会長から委員を本部に推薦する。
- 52.11.23 第38回定期総会で母校創立70周年記念事業実行委員会を結成し、委員長笠原正巳、副委員長に高馬一郎、坂口育三、宮下力を選出した。各支会には支会長および実行委員281名が委嘱された。
- 募金趣意書、募金額、募金申込書、納入方法等種々意見があったが原案で進めることに決定。特別寄付については多くの会員が参加することを建前に討議され、目標達成には特別寄付を仰ぐことになった。
- 52.12. 1 総会で決定した、募金趣意書等の印刷完了し各支会へ発送準備完了。
- 52.12. 2 記念事業専用の振替番号開設。加入者社団法人千曲会、長野13016番。
- 52.12.13 全支会長あて募金に必要な趣意書等を全会員に配布する様に依頼状を添えて発送する。特別寄付についての依頼と支会総会を開催するように協力がた支会長に懇請。
- 52.12.24 常務実行委員会（小委員会）並びに長野県内9支会長（実行委員）合同会議開催。募金の推進法について協議。
- 53. 1.14 常務実行委員会開催。記念事業募金活動状況報告、特別寄付依頼について審議。
- 53. 2.13 常務実行委員会開催。(1)千曲会報No.199号(4月号)を記念事業臨時増刊号として発行決定。(2)クラス別募金推進委員の選出委嘱について。(3)募金申込みのとりまとめ時期について記念事業の推進上重要なので極力8月末までにとりまとめる方針を決定。
- 53. 2.18 各支会長あてに(1)70周年記念事業に関する支会の募金状況及び対策について。(2)千曲会館の施設・設備並びに運営についての要望を照会し回答を求める文書を発信。
- 53. 3. 4 常務委員会開催。支会の募金現況報告のあと、(1)実行委員会会則を審議決定。(2)クラス別募金推進委員の選出と委嘱についてはNo.199号(4月号)増刊号に掲載をもって委嘱にかえること決定した。各支会の募金活動の側面的推進を期待することになった。
- 53. 4. 1 かねて全支会に照会中の募金活動の現況及び新千曲会館に対する希望。意見アンケート取纏とめ千曲会報No.199号に掲載する。

53. 5.26 三重支会募金目標を突破 140% となった。人員割の達成率も 76.5% と全支会のトップ、つづいて北奥支会 131%, 上小支会 112% で全支会平均目標達成率 46.2% となる。
53. 10.20 新千曲館構想発表, 第 38 回総会で千曲会館は 2 階建 660㎡ と示されたがその後の支会アンケートの結果を総合し 3 階建 990㎡, 1 階駐車場, 2 階宿泊施設, 3 階大会議室, 資料室とすることとしその見取図を千曲会報 No.201 号掲載する。
53. 11.23 第 39 回千曲会総会開催。
70 周年記念事業実行委員会開催。
(1) 母校創立 70 周年記念事業費収支中間報告承認。
(2) 母校創立 70 周年記念事業費追加更正予算承認。
(3) 募金活動の今後の進め方について。
まだ募金目標に達していないので全員参加に主旨の徹底をはかり募金活動を進めること。なお募金活動は昭和 55 年度で打ち切りにせず以後も続けることになった。
(4) その他, 会館の維持運営について東京支会から全会員が有効且つ効果的に利用出来るよう考慮し, 維持に支障をきたさない様に要望があった。
53. 12. 1 常務実行委員会開催。先の総会のさい懸案の新千曲会館運営に関する運営委員会と規則について会館竣工の時点で運営委員会を制定する。現在は募金目標達成に重点を置いて活動する。募金の期限について記念事業完遂後新千曲会館は(社)千曲会に寄贈する。これで委員会は解散するが募金参加がまだ出来なかった会員にはひきつづき働きかけるかどうかは理事会で検討する。
54. 3.16 記念事業募金をまだ申込みしない会員に, クラス推進委員連名にて募金協力依頼状 3,000 通発信。
54. 3.27 常務実行委員会開催。(1) 用地取得(代金支払)の時期について。(2) 建物の規模と今後の募金の見通し及募金計画。(3) 新千曲会館管理運営検討委員会(16 名)の結成。(4) 付近住民との話し会の時期について。
54. 3.30 全支会長あて募金申込み現況を報告し, 目標達成するよう協力依頼状を発信する。
54. 4.28 理事会と常務実行委員会合同会議開催。
(1) 千曲会館の規模の決定と起工時期について(資料第 1 案に決定)。(2) 厚生施設楓荘の売却について。理事会として処分決定するが総会の議として提出する。
54. 5. 8 募金目標額にまで達成しない 24 支会に目標達成の協力依頼状を送付。
54. 6. 6 3 月 1 日付申請の普通財産の譲渡について, 長野県から譲渡する旨通牒あり。
54. 6.22 記念事業実行委員長笠原正巳を保証人として長野県知事西沢権一郎と社団法人千曲会理事長母袋忠右衛門との間で県有財産売買契約を締結する。
54. 6.25 NHK 長野放送局より建造物によるテレビ受信障害の事前検討について調査結果の回答あり。
54. 6.28 千曲会館建設運営委員会開催。(1) 新千曲会館建設に伴う建設資金の調達について。(2) 記念事業募金に全会員参加の勧誘について。
54. 7.20 新千曲会館土地(605.82㎡)代金 19,628,568 円支払完了。
54. 7.21 常務実行委員会開催。(1) 募金活動の推進について。(2) 新千曲会館建設工事競争入札及び着工予定時期について。請負業者として上小管内 5 社を選定し, 着工時期を 8 月下旬に決定した。(3) 記念誌発行文献資料の集収について。
54. 7.24 長野地方法務局上田支局において, 新千曲会館建設用地の嘱託登記完了。
54. 8. 3 新千曲会館設計図面の説明会開催。
54. 8. 6 記念事業募金をまだ申込みしない会員に対し協力依頼状はがき 2,500 枚発送。
54. 8.29 新千曲会館工事請負業者 5 社に, 久高設計

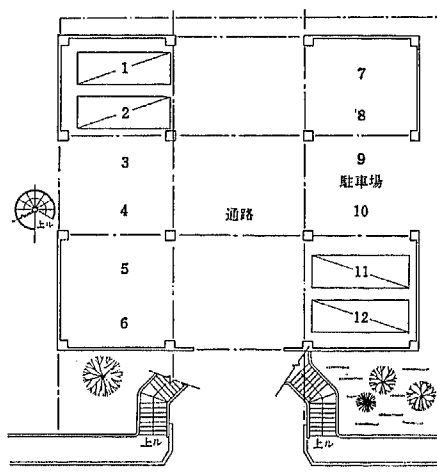




3階資料室兼大会議室



2階宿泊施設



1階駐車場

事務所長の説明会開催。

54. 9. 3 新千曲会館工事請負入札。3回競争入札の結果、株式会社宮下組に落札。工事請負金106,500,000円決定した。但し冷暖房、給排水、衛生設備は除外し、後日再交渉し決定することになった。
54. 9. 6 千曲会理事会と常務実行委員会の合同会議開催。(1)新千曲会館の建設工事請負について。(2)募金の推進について。
54. 9.10 新千曲会館建設工事請負契約書の締結。
54. 9.27 常務実行委員会開催。(1)募金活動の滞滞支会の活動促進について。支会総会の開催を促し本部から複数の役員が出席して協力をお願いする。(2)千曲会定期総会に出席の勧誘について。
- 54.11.23 第40回社団法人千曲会定期総会開催。(1)記念事業費54年中間報告可決、(2)記念事業費追加更正予算可決、(3)募金活動の推進、(4)会社一般からの寄付について協議。
- 54.12.22 理事会開催。会社一般からの寄付募金の進め方について協議。理事長名の趣意書、依頼状を各支会長に発送し、支会が中心になって寄付募金を進めて行く。募金は1口10万円とする。なお支会から本部に要請があれば役員が出向いて募金活動を進める。
- 54.12.27 母袋理事長、笠原実行委員長ほか上田市役所に石井泉市長を訪問し70周年記念事業援助の陳情する。
55. 1.29 市川文夫信学会理事長他2名来会し千曲会館施設特別寄付の申出あり。
55. 2. 5 学内実行委員の各学科代表連名にて、募金の申込みをまだしていない会員に協力がたへガキにて2,500枚発信する。
55. 2. 6 常務実行委員会開催。総会で決定した会社・一般からの寄付募金について。
55. 2.22 各支会長あてに趣意書、依頼状、封筒等を一括発送し、支会の協力をお願いした。
55. 2.22 常務実行委員会開催。(1)関係会社・一般からの募金について、予定会社を選出し本部から支会長あてに通知する。(2)上田地区会社の寄付募金について選出し、寄付募金活動をする。(3)記念事業千曲会館建設について陳情書を上田市石井泉市長および小林軍治市議会議長に提出する。

55. 3.29 理事会開催。(1)新千曲会館管理委員会の発足, (2)新千曲会館の使用料について, (3)記念誌編集委員の委嘱について。
55. 4.17 沖繩関ヶ原石材緑間社長の特別寄付 2 階ロビー 70㎡に御影石の敷つめ作業初める。
55. 5. 6 新千曲会館建設工事のうち冷暖房, 給排水, 衛生設備その他工事の請負契約す。工事費は20,000,000円とする。
55. 5.15 常務実行委員会開催。(1)会社・一般からの寄付募金については千曲会館の設備充実にあてて願います。(2)未申込み会員の募金協力の依頼状を出すこと。
55. 5.22 新千曲会館管理運営委員会開催。
55. 6.27 坂口育三副委員長どうだんつゝじ15本, 松井信事務局長柱時計 1 個, 玉ひば20本植樹して寄付, 白井要範常務実行委員保管庫 1 個寄付。
55. 7. 5 理事会開催。(1)不動産処分について(楓荘), (2)千曲会館落成祝賀会準備委員委嘱, (3)募金活動の推薦について。
55. 7.10 母校創立70周年記念誌第 1 回編集委員会開催。
55. 8.11 母校創立70周年記念千曲会館落成式典並びに祝賀会開催の案内状を会員 3,200 名に往復ハガキで通知する。尚千曲会報10月号(No207号)で全会員に知らせる。
55. 9.10 記念事業募金未申込み会員, および申込みされてまだ完納されていない会員に協力依頼状発信。
55. 9.25 記念誌編集委員会開催。
- 55.10. 2 常務実行委員会開催。(1)70周年記念千曲会館建設費収支について, (2)70周年記念千曲会館落成祝賀について, (3)落成式参列者, 会員出席488名。

千 曲 会 館 施 設 概 要

信州大学繊維学部創立70周年を記念して新千曲会館建設が議決されてから 3 年有余, 待望久しかった同会館がこの度目出度く竣工した。

募金参加会員は3,270名, 募金申込額120,015,000円。千曲会館建設に伴う設備充実に御支援いただいた上田市役所より補助5,500,000円, 会社一般から, 45社7,060,000円ご寄付, 財産処分, 其の他。

新千曲会館の施設概要は次のとおりである。

土地; 605.82㎡

建設延面積; 995㎡

1 F 339㎡ 駐車場 (12台分), 動力室

2 F 330㎡ 小会議室 (30席分), 事務室, 書庫, 厨房, 管理人室, 浴室, 化粧室

宿泊室 和室 2 (合計 6 人) 洋室 2 (A 2 人, B 4 人)

3 F 322㎡ 大会議室 (180席分 3 分割許可), 資料展示室

1. 千曲会館建設費	159,114,468円
土地	20,017,168円
建物	104,939,600円
附属設備	34,157,700円
器具備品	4,450,690円
2. 落成式費	5,000,000円
3. 事務費其の他	13,969,000円
総 計	182,534,158円

千曲会（時）報の歩んで来た道を顧みて

香山清和（紡3）

母校第1回卒業生が出た翌年大正4年1月松村季美氏等が主となり上田蚕糸専門学校同窓会が設立され規則を定め、その中に刊行物の発行があった。それにより大正4年4月同窓会報告という表紙付の冊子を第1号として発行した。大正10年7月7号から「告書」の2字を除き同窓会報とし、始め年1回発行であったが11年から年2回とした。次第に内容が充実して来たので昭和3年から同窓会報を内容によって2分し、1つは純然たる蚕糸業の学術雑誌として専ら試験研究の発表諸調査の報告並びに抄録等を登載し是れを「蚕糸学雑誌」として発行することとなった。また他の1つは主として本支会会員等相互の通信連絡機関として同窓会報とし、各々年2回宛発行することとなった。5年に至り蚕糸学雑誌は年3回発行するようになり、1方同窓会報は20号を以って廃刊し菊倍版新聞型の10乃至20頁の千曲時報となった。これは同窓会という名称が7年から千曲会と呼称するようになったのを機に形状も名称も変更したのである。

千曲時報の第1号は昭和5年4月15日発行され、その他の刊行物と共に加美好男氏（平沢勝氏、垣内源一氏と共に）が編集発行人となり同窓会から独立した組織で経営され、はじめ5号活字のみであったが、9ポが主、後6号活字も加わるようになり大体8頁、毎月発行であった。その後同窓会が直接経営することになり昭和5年12月14日発行9号から森山二郎氏が編集発行人となり毎月発行6—10頁9ポ8ボであった。昭和7年5月15日発行26号から須田圭二氏が当り大体毎月発行であったが原稿不足で6頁に減ってしまったのを高島秀男氏、芝荒雄氏等が批判投稿し、内容が悪い、他人の原稿に頼らず自分で書けと云われ、須田氏は嫌気をさして投げ出し、その後誰も引き受け手がないの

で香山清和が9年5月15日発行51号から責任者になった。やるとなると気狂いのようになって一生懸命にやるのが私の性分である。高島氏等の意見を参考とし第1面は第3種郵便物（郵税たった5厘）の関係上学術的な記事を載せ（出題して書いて貰うことが多い）、他

は殆んど本支会の連絡事項を主とし大部分編集発行人が執筆し母校ニュース、校友会ニュース等まで入れた。能率上印刷所は信毎印刷から市内中沢活版所へ変更し内容を多くするため全部6号活字、 $\frac{1}{2}$ 行間、 $\frac{1}{4}$ 行間、場合によってはベタ組もやった。そして全会員、母校全職員は勿論、学生にも配布した。広告も3頁（過去将来にない時もあった）位とり、出張時は1〜2個所位広告の取れる処を予定に入れた。年賀及び暑中広告、新退任挨拶は殆んど全校職員に出して貰った。活版所へ行き原稿を書き乍ら校正する幾夜が続いた。それは

編集委員が現在10人以上いるのに対し当時は3〜4人であったのによる。斯くて完全に毎月発行、平均16頁、多い時は32頁（然かも1頁字数は現在の約2倍）にもなった。このため予算を超過したが林会計理事は受け入れて呉れた。これは広告収入の外に、会費の収入が多くなったからである。その証拠に林理事は「もう2〜3年経つと会費は徴集しなくてもよくなるだろう」と云った。この時が千曲時報、千曲会の最盛期であって、今後こうした時期は2度と来ないであろう。

私のこの仕事も母校を退職し渡満することになったので昭和14年4月20日発行104号で辞し、以後小松忠一郎氏がやることになった。16年1月5日発行127号から千曲会報と改名しこれを新1号とした。17年5月25日発行16号から荻原清治氏が担当したが逼迫した社会情勢のため以後46倍版33、34、35号をまとめて発行し遂に19年1月25日36号を以って廃刊された。



終戦後22年9月従来の形に戻り復刊第1号(37号、通算163号)が町田博氏により発行され、26年3月42号からは田口亮平氏、22年以後は年2回発行に減少し、31年4月1日発行54号から小山長雄氏が担当し殆んど毎月発行となり31年8月1日発行58号から会報は時世に即して大変革を行い今までの縦書きを横書きに、大きさを菊倍版からB5に、活字を6号から8ポに変更した。なお印刷所も終戦後中沢活版から田辺印刷KKに変わった。小山氏はこうした仕事に堪能且つ熱意のある人で以上の外、多くの模様変えを行った。

36年2月1日発行107号から小林尚一氏が当り、私は内容不満を改めるため進んで編集部の1員に加わり年4回発行案の出たのを先ず完全に毎月発行とし内容の変更を行った。44年4月15日発行165号から再び小山長雄氏が担当した。44年8月20日発行173号から竹

田寛氏が受持った。この時から年3回発行位に減少した。50年6月1日発行190号から編集発行人は千曲会理事長母袋忠右衛門氏名とし実際の仕事は編集委員がやる事となり小山長雄氏が主としてこれに当り、この時にも形式に多少の変更が行われた。52年6月1日発行196号から青沼茂氏が、54年1月1日から三石賢氏が責任を持って現在に至っている。最近第1面は小山長雄氏の付近の景色を画いた見事な墨絵によって飾られ大いに体裁をよくしている。

こうした報告は何年何月何日発行何号から編集発行人何某というように列記する第3者的立場で書くのが正しい形式かも知れないが、私が書くとなると、その時の状況、感想などを入れたい。本当はもっと具体的な事を書きたいのであるが当り触りがあるので遠慮した。

「蚕糸学雑誌」刊行の記録

山 口 定次郎(蚕12)

蚕糸学専門の学術雑誌として、上田蚕糸専門学校同窓会により「蚕糸学雑誌」が発刊されたのは、今から52年前の昭和3年(1928)7月で、日本蚕糸学誌の創刊(昭和5年)より先んじること2年前であった。

それまでは大学、専門学校、各種研究機関、団体などの報告は別として、一般の研究報文は農学会報、動植物学雑誌や工学系雑誌など、基盤の広い雑誌に掲載され、時には通俗雑誌の蚕業新報や大日本蚕糸会報(後の蚕糸界報)にもしばしば重要なものが載せられていた。

遡って上田の同窓会報は大正4年(1915)の創刊で、機関誌ではあったが、学術報告を重んじて登載した。しかし蚕、糸、紡の卒業生も凡そ100名に及び、貴重な研究報告も多く発表されるようになり、同窓会本部も会報の拡張発展を考えていた折、同窓会が代議員制度に改められた昭和2年の12月、第1回総会(千曲会の法人化は昭和7年)において、近

畿支会から「同窓会報は今後さらに発展させ、会報と学術雑誌を分離発行するように」との提案があった。

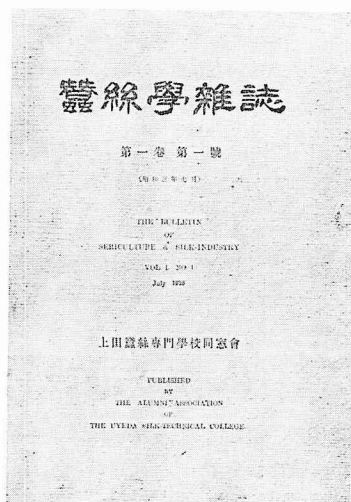
同案は慎重審議された末、全員賛成で可決されたのである。

こうして新発足の雑誌は「蚕糸学雑誌」と命名され、報文原稿も、母校関係者に止まらず、広く一般からも募集し読者層も拡大するようにと配慮された。

発行・編集・印刷など

雑誌名: 雑誌名は「蚕糸学雑誌」
The Bulletin of Sericulture & Silk-industry と命名した。

発行者: 発行者は、初め上田蚕糸専門学校同窓会 The Alumni Association of the Ueda Silk-Technical College であったが、昭和7年に千曲会は法人となったので、上田蚕糸専門学校千曲会 Chikumakai, The Alumni Association of the Imperial College of Sericulture and Silk-industry,



Ueda, Japan となった。

発行巻号・年次：発行巻号は次表のとおりである。

巻：号	年 次	巻：号	年 次
I：1～2	昭3～4	VIII：1～3	昭10～11
II：1～2	5	IX：1～3	11～12
III：1～3	5～6	X：1～4	12～13
IV：1～3	6～7	XI：1～4	13～14
V：1～3	7～8	XII：1～3	14～15
VI：1～3	8～9	XIII：1～3	15～16
VII：1～3	9～10	XIV：1～3	17～18

但しⅧ巻1～2号は母校創立25周年記念論文集として合本し発行した。

以上全部で14巻42号で毎号300部を印刷発行し、定価は1部金1円で会員に配布した。14巻3号をもって発行を中止したが、これは大東亜戦争のため資材統制となり用紙の配給がなくなったためで、残念ながら以後の発行も不可能となり発刊の止むなきに至ったのである。

編集・発行・印刷などの責任者

第1～3巻は編集者は上田蚕糸専門学校同窓会（理事長蒲生俊興）発行兼印刷者は東京明文堂社長周防初次郎、印刷所は明文堂であった。

第4～9巻は編集・発行者ともに理事長蒲生俊興、印刷者は大日向利雄（信毎）、印刷所は長野市信濃毎日新聞社、発行所は第4巻は同窓会、5～9巻は千曲会（社団法人千曲会）であった。

第10～14巻は編集発行者は理事長蒲生俊興、印刷者は猪坂直一、印刷所は第10～13巻は上田市「生糸の国」社（社長猪坂直一）発行所は蚕糸学雑誌発行所である。但し第14巻のみは「生糸の国」印刷と共に長野市柏与印刷合名会社となった。

編集責任者：編集員は編集委員と編集幹事に分けられ、編集委員には蒲生俊興、林貞三、八木誠政、野崎清、野口新太郎の5氏、編集幹事には、学内外各部局から、須田圭二、猪坂直一、勝又藤夫、香山清和、荻原清治、山口定次郎、宮坂収の7氏が推選され担当したが、年3、4回の発行だったので、幹事各位は長年一方ならず努力奮闘をされた事が思出される。

雑誌の形式・内容：雑誌の大きさはB5判、初期は上質であったが、末期は稍悪質になった。報文は9ポイントでその他は6号、初期33字×38行詰め、後期は42字×42行詰めであった。内容は初め報文の他に蚕糸、繊維に関する内外の論文の抄録を多数載せたが、後に

は、学内で抄録雑誌「日本蚕糸総覧」が発行されたので、報文の他は、資料調査、総合抄録などで編集するようになった。

なお第8巻から14巻までは報文題名下に欧文を付け、また原則として、欧文のRésumé（抄訳）を記すことにし、別に外国向けにRésuméのみの別刷を作り発送し、一方で外国文献交換の便宜も計った。これは当時としては欧文Résuméの“はしり”ではなかったかと思われる。

また昭和10年（1935）には母校創立25周年に当り、記念論文集（第8巻1・2号合本）を発行した。これには報文33件の他、松村（蚕1）、西山（蚕9・京大）、小泉（蚕12・京大）などその頃学位を獲られた3氏の学位論文要旨を載せ、さらに大正4年（1915）創刊以来の同窓会報と「蚕糸学雑誌」に発表された多数報告の総目次を掲載した。これはB5判約450頁で、厚さ2cmの部厚いものとなったが、これを記念号として500部を印刷し、一般会員には1部2円で頒布し、記念式典来賓には記念品として贈呈した。

編集・経営の実務者

編集委員と編集幹事は前にも記したが、この雑誌の主唱者の一人であり、発行・編集の代表者でもある蒲生理事長は、関係15年間一貫してその中枢となり、名実ともに立派に指揮・管理を全うされたが、その功績は極めて顕著なものがあると思う。

次に、加美好男氏（糸3卒・45才で他界）は編集、発行、販売などの実務者として、第1巻より3巻までを担当されたが、氏は日本における人造絹糸の初期よりの権威であり、当時丁度、母校でレーヨンの研究に従事しておられた折で、雑誌提唱者の一人でもあり、責任を感じられ、自ら進んで発刊の基礎を築き、初期の難局を背負い、全面的に献身尽瘁された人である。私たちは、特記感謝して、永く忘れてはならない人であると思う。

さらに、猪坂直一氏は第10巻より14巻まで、印刷、経営全般を担当された。前記加美氏のあと、第4～9巻は主に学内関係者により運営されたが、かなり経営が困難となり、理事長はじめ同窓会は苦慮し協議を重ねた所、幸に上田市内で雑誌「生糸の国」を発行中の猪坂氏（蚕6卒、千曲会相談役、現イサカ繊維工業所社長が、同窓会、学会のためならばと、利己を離れ、困難が予想される経営面の全責任を担われ、事業の堅実な推進に尽力して下さったので、恙なく終りを全うすることができた。その深い同窓愛や、大きい義侠心

に対し、私たちは永久に敬意と感謝を忘れることができない。

最後に私は、蒲生教授の研究室にお世話になっていたが、先生は教育、研究、講演、就職斡旋などで多忙の上に、同窓会理事長であるので、第4から14巻までは、当然のことながら、編集発行の実務は、私が常任の幹事として仰付かることになった。この仕事は力不足の私にとっては大変重荷であったが、すでに創刊の頃からお手伝いをしていたし、委員、幹事諸氏の熱心な協力があったので、むしろ自分の勉強にもなり、プ

ラス面が多かったことを感謝している。編集上の不備や独断、校正の誤りも少なくなかったことなど、今日省みて、まことに恥かしい思いがする。しかし、前にも記したが、母校25周年記念論文集は、その年の夏3ヶ月余り、大学入口南側の古い官舎に单身籠城して、針塚校長や理事長などの激励に支えられつゝ、心血を注いで編集に携ったもので、生涯忘れえない思出にもなり、私のひそかなモニュメントにもなったように思われてまことに喜ばしい。

日本蚕糸総覧のこと

母校創立70周年記念誌にこのことについて書いて欲しいと係の三石賢君より依頼がありましたが何しろ戦前のことであり、既に40年も遡る話であるので、記憶が定かでない。幸いにして総覧誌が私の古図書のある物置きから創刊号から終刊号までのものが欠号なく見つかったので、それに基づいて総覧の足跡を記してみた。

上田蚕糸専門学校同窓会内蚕糸科学研究会発行「日本蚕糸総覧」第1巻・第1号として生声をあげた発行年月日は実に昭和5年5月10日であった。編輯兼発行者名は加美好男氏(糸3・故人)であり、その編輯方針は冒頭に総説として主に当専門学校教授の研究分野に関する論説が毎月1つずつ載せられ、次に蚕糸総覧の主体たる関係文献の抄録文から成り立っている。抄録の大きな項目は蚕桑・製糸・一般動物学・一般植物学・一般繊維・機械・経済・雑となっている。さらにそれらが専門的に細分されている。抄録者は校内の我々同窓会の先輩の研究者達であることが分る。当時どの位の発行部数であったかは分らないが、刊行前に予約制度をとっており、この総覧の刊行を早くやって欲しいと望む注文者に対する詫び文から推察すると可成り

山崎 嘗 録 (糸19)

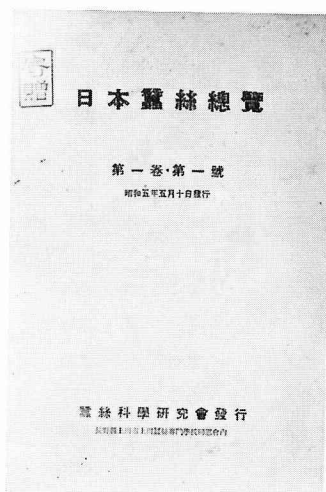
の数にのぼっていたと想像される。要するに当時において蚕糸・生物・農業・工業・経済にわたる100を越す雑誌・報告の類が入手され、これらを迅速に抄録して全国の研究者に研究の便をはかるというのがこの雑誌の刊行の趣意であり、当時珍らしいものであった。

以上の編集方針は以後においても継続され、加美好男氏は昭和7年8月号(第3巻・第8号)をもってや

められ、平沢勝氏(蚕3)にバトンが渡されている。つまり加美氏は日本蚕糸総覧の創始者として2年半この事業に専念され地盤を築かれた功績は高く評価されるべきである。加美氏はまた日本における人絹の創業者として名をなした大先輩である。平沢勝氏は昭和7年9月号より全く同じ編集方針の下に昭和12年8月号(第8巻・第8号)までやられた。実に満5ケ年の長きにわたっている。その間の御苦労と御努力は大変なものであったにちがいない。

その後を引き受けられたのは小見益男氏(蚕3・故人)であった。小

見氏は昭和12年9月号(第8巻・第9号)から昭和13年6月号(第9巻・第6号)まで1年未満でやめられた。この後を引き受けることになったのが私であった。その頃、林貞三先生(糸3・故人)から私にこの仕事を



やるよう依頼の話があり、全然自信はなかったが是非ということでやることになった。昭和13年7月号(第9巻・第7号)より発行者・林貞三、編集者・山崎管録という形でそれまでの編集方針の下に引き継がれた。

昭和14年に入って日本蚕糸科学研究会の委員長として当時の蚕糸専門学校長の井上柳梧(故人)、編集委員として林貞三・小松 忠一郎(紡3)・窪田 潤(糸・12故人)・山口定次郎(蚕12)・山崎管録の新組織の下で抄録項目分類に補足修正を行ない、また経済・法制の分野を強化して当時の情勢に対応することにした。

昭和16年に入り総説の次に紹介の項を設け、英米における近刊の専門雑誌より斬新な記事を私が翻訳して紹介することにした。月々大変な仕事であったが大いにやり甲斐があった。なお編集委員の変更として小松忠一郎氏から野口新太郎氏(紡2)へ、窪田潤氏から荻原清治氏(糸12・故人)へ、また他に坂口育三氏(蚕22)が加わった。

昭和16年12月太平洋戦争の勃発にともなう時代要請により本会は東亜繊維科学研究会、本誌名は東亜繊維総覧と改名され戦時下あわただしい世相を迎えることになった。戦争の長期化と共に紙の不足が著しくなり日本の出版界は整理統合が勧奨され、この繊維総覧はついに昭和19年3月(第15巻・第3号)をもって終刊し、繊維学会誌へ併合されることになった。私の担当した期間は足掛け6ケ年で、創始者・加美好男氏、平沢勝氏、小見益男氏、私へと引き継がれ4氏のうちで私が最長年月この同窓会の事業としての総覧の経営と編集の仕事を手がけたことになった。今にして思えば大変な仕事であった。

ちなみに私が当った当時の総覧の印刷部数は千数百で頒布範囲は全国都道府県はもちろん朝鮮・台湾・沖縄にまで及んでいたことを付記してこの稿を終わることにする。

千 曲 会 会 員 数 (昭和55年9月現在)

学 科 名	総 会 員	物故会員	現在会員	備 考
養 蚕 科	1,250	501	749	
織 維 農 業 科	199	8	191	
製 糸 科	1,191	503	688	
紡 織 科	612	160	452	
織 維 化 学 科	333	36	297	
専 修 科	48	2	46	
蚕 糸 別 科	286	6	280	
教 婦 科	351	24	327	
(大 学)				
織 維 農 学 科	682	8	674	養蚕学科(大学)を含む 製糸学科(大学) } を含む 紡織学科(大学) }
織 維 工 学 科	1,318	14	1,304	
織 維 工 業 化 学 科	937	7	930	
織 維 機 械 学 科	714	3	711	
織 維 化 学 工 学 科	475	1	473	
大学院織維学研究科	399	1	398	
計	8,795	1,275	7,520	

思 い 出 の 歌

校 歌

一
 中 國 の 名 を 守 る 者
 龍 虎 の 道 を 究 め け
 富 貴 榮 華 は 何 らん
 つ ず 誠 乃 あ り 足 る や

二
 夜 を 目 撃 し 勞 働 歌
 身 心 汗 血 を 流 せ
 神 の 恵 賜 と や ち か ち
 深 き 國 情 を 心 ざ せ

三
 都 市 花 を 足 踏 み あり
 千 曲 の 川 水 光 り 月 の
 吾 等 徳 を つ け て
 清 き 其 の 名 を 歌 へ

四
 法 國 乃 た 名 を 守 る 者
 盤 絲 絲 道 を 究 め け
 富 貴 榮 華 を 開 か む
 清 き 其 の 名 を 歌 へ



学友会歌

1. 大いなるかな浅間山
轟々と乾坤どよむ
聞け神秘の雄呼びを
蓋世の士氣身に沁む
矜れ健児
高き啓示高き啓示こゝにあり
2. 麗しきかな菅平
揺々と若葉しげる
見よ清和の高原を
青春の愛野に光る
矜れ健児
深き喜悅深き喜悅こゝにあり
3. 聖らけきかな千曲川
涼々と千古のひびき
あゝつきせぬ努力の譜
精励の志操胸にわく
矜れ健児
尊き教訓尊き教訓こゝにあり

学友会応援歌

1. 凝りては百練の鉄
肉は鳴る腕の力
あゝ進め強敵何ぞ
いざゆけ吾等
常田の健男児
2. 奮ひては浅間の響
熱血湧く青春の意気
あゝ進め必勝期して
いざ行け吾等
常田の健男児

修己寮々歌 友に告ぐ
玲瓏として高き吾妻の霊峯
千秋の白雪燦として蒼穹に映え
涼々としてつきぬ千曲の清流
厳かに千古の神秘を語る
あゝ秀麗の気凝りて美しきかな
常田ヶ丘
この悠久の天地つきぬ生命の流れ
それ団結の精神溢るゝは
偉なる理想
堂々と歩武を進めん
聖らけき自然の啓示
山宗め享け鍛へ研ぎて
常陵に古きを誇る我が修己寮史
新しく進み行く若人の行手を示す
熱血の歌いざや歌はん

白雲なびく

1. 白雲なびく山脈越えて
静けき春を信州に訪う
白樺の原森早緑萌えて
若草の高原陽炎ゆらぐ
2. 緑の木蔭に豊かに匂う
鈴蘭の花慕いて歩む
観喜満てる神秘のめぐみ
清岩に聞く華切の歌

養蚕学科応援歌北極星

1. 北極星の影冴えて
浅間の嶺に吹く嵐
千曲の水に身を鍛え
赤き血潮の若人が
仰ぐ眼の射る所
月の桂の樹は青し
2. 蒼天高く地は広く
時信州の秋深し
熱と力の若人が
立てば玉散る血の火花
煙塵天を掩ふとき
敵敗兵の影何処
3. 戦禍の巷雲晴れて
明星天にまたゝけば
月桂冠に映えるとき
戦勝の旗空高く
凱歌の声も高らかに
養蚕健児意気高し

製糸学科応援歌 雲流れ行く

1. 雲流れゆく東に
静閑を破るくたかけや
大席の影 陣鼓の音
捷破の時はめぐり来ぬ
さはれ門出の杯に
若きこの胸迫る哉
2. 消えゆく星の想ひ出に
そぞろゆく日のありありと
苦練のひびき誓ひ言
春秋淡く時ぞ今
さはれ別れの送り火に
紅の血ぞうづく哉
3. 烈日の下血はもえて
仰げば高し趣味の峯
顕正の楯破邪の剣
吾が紅の顔は
出陣の調べに戦勝の
希望に満ちてもゆる哉

紡織学科 応援歌凱歌

1. 紫紺の連山日に映えて
秋清冷の常陵に
栄冠重ねし紫旗の下
あゝ出陣のあさばらけ
2. 胸の血潮の若ければ
今日紅の火と燃えて
斗はんかな弦の絶へ
千古の太刀の折らんまで
3. 秋揺落の風立てば
傾陽舞に輝きて
遙に仰ぐ明星に
凱歌の酒をくまんかな

繊維化学科応援歌 常田ヶ丘

1. 常田ヶ丘に聳え立つ
朝日に映ゆるいらかこそ
吾等健児が胆を練り
腕を磨く学舎なれ
2. 蒼々清き千曲川
水は不撓の意を示し
辺りに青き若き木は
吾等を讀ふ色深し
3. 山と川との精をとり
化学の道に勤しめば
理想は遠く意気高く
心の駒は勇むなり
4. 若き草木の生い立てる
こゝ秀麗の地を占めて
朝な夕な弛みなく
栄えある歴史築かなん

啓明寮々歌 嗚呼歌え新墾の地を

1. 憧れの丘を越えて
君と行く常田の朝
風よ吹け乱れる髪に
日は昇る東の山
2. 水清き千曲のせゝらぎ
河原の干草に伏して
夢よ行け流れの果てに
き霧濃き浅間の麓
3. 啓明の窓を慕ひて
星は指す四年の誓い
君語れ値の幸を
広くのみ澄める夜の空
4. 曙の緑うそぶき
学舎に空は晴れて
あゝ歌え新墾の地を
いざ競え青春の花